IMAJ ニューズ
NO.26
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和56年8月20日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL.03－821－3737(代)
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN　〒113・東京都文京区千駄木4－13－4

第三の国際連帯

・新時代の国際チームワークとは何か？・

明星大学講師
布施　勉

現代における具体的でかつ大規模な国際連帯のこころみは、過去2回あったと思う。
こうした意味で現在必要とされている連帯は第3の連帯とでも呼ぶべきものだろう。
（1981年MRA小田原国際会議より）

LETTER from abroad

見た日本　感じた日本……Ⅱ

ヴァンダー・ジー夫妻（オランダ）

日本の主婦はより受身で御主人と共通の基盤が少ないように思えます。もち論伝統は尊重されなければならないが、才能が用いられず無駄になっているのではないのか、夫婦が新しい道を見つけもっと共に過ごすべきではないのかと考えずにはいられませんでした。

++++++++その他の主な内容++++++++++++++++

●MRA小田原国際会議レポート
「アジアの燈台に灯がともされた日」
藤田彰子
●インタビュー「コモエスタ・ウスデ？」
チリの労組指導者4人から聞く
●MRA世界のセンターめぐり……Ⅳ
フォーティーフォー・チャールズストリート
（イギリス）

第三の国際連帯　布施　勉

―新時代の国際チームワークとは何か―

・MRA小田原国際会議に参加して・

六月四日から八日まで小田原のアジアセンターに於て、〝新時代の国際チームワーク〟というテーマの下に第四回MRA国際会議が各国からのゲストをまじえ開かれた。

全プログラムを通して参加していただいた明星大学の布施勉先生に〝第三の国際連帯〟という観点からこの会議の持つ意義を探っていただいた。

一、いくつもの顔

去る六月五日から七日にかけて、小田原のMRAハウス・アジアセンターにおいて、「新時代の国際チームワーク」という総合テーマの下で、MRA国際会議が開催されたが、きわめて時宜を得たものであったといえよう。私自身も、此の会議に参加する機会を得て、大変得るものが多かった。しかし、私がそこで経験したことは、すばらしい友人を数多く獲得したことや、それらの友人と夜の更けるのも忘れて話合ったことなど、有意義でかつ楽しかったことばかりではない。それに加えて、このような話合いを、我々の日常生活に比べて、むしろ有り余る時間の中で行っているのにもかかわらず、何かどこか物足りない、何か大切な部分がポッカリとぬけ落ちているといった感じが、私を苦しめてならなかった。

それはなぜなのだろうかと、私はずっと考え続けていたが、昨年も私とともにMRA箱根会議に参加した私の教え子の一人の学生の言葉を聴いて、愕然とせずにはいられなかった。彼は何げなく、ふと次のようにつぶやいたのである。「・・・人間には、いくつもの顔があるのですね。新聞などでよく見かけるあの人の顔と、この会議の期間中、ロビーで話を聴いたあの人の顔とでは、同じ人の顔とは思えません……」。つまり彼は、直観的に、二つの顔の間に何らかの断絶があるのを感じ取っていたのである。とすると、この会議は一たい何なのだ。現実社会とは何らかの意味で隔りがある、やはりおとぎばなし的世界のお話なのではあるまいか、何か変だな、と彼は感じたというのである。その時、ああなるほどそうなのかと、私は、ずっと考え続けていた疑問が、急に解けたように思えた。つまり、「新時代の国際チームワーク」というテーマで話合いが進められながら、「国際チームワーク」ということは、いったいどういうことなのか、現在どのような国際チームワークが国際社会の場で、具体的に求められているのかといった、現実社会では議論の中心に据えられるべき部分には触れずに、いや、むしろそのようなややこしい問題は軽くやりすごして、何となく話合いを進めて行く、どうもその辺に問題があるらしいのである。そうすると彼が直観的に感じているように、現実社会のしがらみと、きびしさの中で生活している人々の顔と、ここでの顔は、意識するとしないとにかかわらず、別な顔にならざるを得ないのではあるまいか。私は、あえて荒っぽい言い方を、お許し願えれば、そのようないくつもの顔が存在する状況を好ましいとは思わない。個人的には、むしろ嫌いである。そこで、よりきびしい状況に自らを置き、私自身のいろいろな顔を一つにするために、ある夜、

●スピーチをする布施先生（小田原会議）

学生諸君とともに、私的でかつ細やかなセミナーを持った。

二、ある夜のセミナー

学生A「先生この会議の『新時代の国際チームワーク』というテーマは、いったい具体的にはどのようなことを意味しているのか、僕にはさっぱり解らないのですが・・・」

学生B「僕は何となく解るような気がしますが、具体的にはよく解りません。国際的レベルで、もっとみんな仲よくして協力し合おうと云うのではないですか・・・」

私「うん、これはむずかしい問題だけれども、ただ、みんな仲よくしようよというだけでは、新時代に向けてたいした意味を持たないな。つまり、昔から、みんな仲よくしようよと、いろいろな人々が云ってきたのだけれども、人類は、一方で戦争をやめることは決してしなかったし、お互い同志の激しい闘争を繰り返してきているよ。このような歴史的事実を踏まえて考えてみると、ただみんな仲よく協力しようなどというスローガンは、大して役に立たないことは明らかじゃないのかな」。学生C「・・・そうすれば、新時代の国際チームワークというテーマのポイントは、新時代をどのような時代と考えるのか、つまり、これまでの時代とはまったく異っているという意味で、新たなチャレンジが必要とされる時代であるかどうか、この辺の明確な認識にあるのではないかと思うのですが……」。私「うん、その通りだと思うよ。新時代がどのような時代なのかという明確な認識を持つこと、この点が第一のポイントだろう。しかし、それだけではもちろんだめで、第二のポイントが必要だね。つまり、第一のポイントで明確にした新時代の概念を前提として、そこで必要とされる国際的連帯は、実際に、どのようなものであらねばならないのかという検討だよ。その場合、我々学徒としては、過去の時代に行われたさまざまな国際連帯を、過去の時代そのものの分析とともに歴史的に検討するという作業が必要だろうね」

三、新時代とは・・・第一のポイント

私「A君、第一のポイントである『新時代』について、君はどのように考えている?」

学生A「この点については、僕は既に明確なイメージを持っています。つまり、先生が昨年一年間大学で講議されたことも関連するのですが、現在は、日本、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、あるいはアフリカといった個々の国家や地域の個別的な問題を越えた、全地域的な規模における人類の危機の時代に突入しようとしているという明確な認識から出発しています。従って、新時代は、我々人類が総体として将来この地球上から滅び去ってしまうのか、それとも、生き残れるのかという結末を、我々自身が選択しなければならない分岐点にさしかかっているという時代だと思うのです」。

私「人類の危機という発想は、過去幾度も現われたことがあるが、現在まで、ともかくも人類は事実として生き残っているし、かえって繁栄すらしているということから、ある人々は『またか』とそのような考え方に否定的な答をしているが、その点はどうだろうか?」。学生B「僕もA君の意見に賛成です。過去の危機論も、よくよく検討してみると、やはりそれなりの意味を持っており、実際人類にとってそれぞれが危機だったと思います。しかし現在の危機は、その質においても、また規模においても過去のものとは比べようもなく大きなものであるし、また、いわゆる『逃げ道』が無いという点で、きわめて切羽つまったものであると思います。たとえば、石油をとってみれば、以前は、一本の油井が涸れたとしても、またどこかで新たな油田が発見されたり、あるいは発見される可能性があった。つまり、問題は新たな油田をさがす人間の努力にあったと思います。従って、努力のかいあって新たな油田が発見されれば、危機はひとまずその時点で回避されるのです。しかし現在は、石油そのものが枯渇しつつある。つまり、油田をさがす人間の努力だけではどうしようもないのです。このように、従来型の危機とは、やはり本質的に異っていると考えなければならないと思います」。

学生C「僕も危機の本質が従来のものとはずい分ちがう、つ

●会議に参加した横浜市大の皆さんと

まり、いよいよ本物の危機がやって来つつあるぞという感じがしています。この危機は、その形態においても、また規模においても、巨大なものであり、死物狂いでこれに対処しなければ、人類はこれを乗越えられないのじゃないかと思っています。

過去の危機は、今から考えると、やはり全体の中の部分としての危機だったと思いますが、今我々が直面しつつあるのは、全体的かつ総合的な危機だと思います。僕は一人でアパートに下宿しているのですが、月末になって悪条件がかさなると、絶望的になることがあります。御飯をたこうと思って米櫃を見ると米がない。ではカップラーメンで済ませようかと戸棚を覗くと、ちょうど昨日で食べ切ってしまっている。そんな時に限って同時に醤油も味噌も無くなる。新聞代や電気代の集金が来る。仕方がないので外食しようとして財布を覗くと十円玉一個しかない。では貯金でもおろすかと通帳を覗くと、ああそうだった、前々から買いたいと思っていたあの全十巻の全集を買ってしまった、中味はカラ。とに角悪い条件が一挙に押しよせてくる。そう云う時があるものですが、新時代の危機は、そのような感じのものじゃないのかと思っているのですが……」。

学生A「C君の云う通りだと思います。昨年先生の御指導で読んだ『二〇〇〇年の地球――二十一世紀の始まり』と題されたアメリカ大統領に対する報告書は、約二〇年後の我々人類の予測を行っているのですが、人類が直面するであろうあらゆる状況に関して、きわめて悲観的な数字を提示しています。僕はこの報告書を読んだ時、大変大きなショックを受けました。しかし先生もおっしゃられたように、我々は現実に目をつぶってばだめだ、事実を冷静に認識することから出発しなければならないと思いかえしました。そしてそのような冷静な事実認識にもとづいて、それを乗り越えようとすることこそ、本物の勇気ある行為であり、そのような人こそ、本当の勇者であると思いました」。

私「A君がそのような心の葛藤を経験したということは、大変貴重だと思う。私は我々学徒に真に要求されていることは、冷静に事実を見つめる目を持つことと、溢れる情熱をもって、それを乗越えようとする勇気だと思っている。そうすることによって初めて、学徒として全人類に対する責任を果たすことができるし、又、全人類とともに限りなき愛を分ち合うことができるのではないかと思っている・・・」。

学生B「僕は、学生としてそこまでつきつめて考えたことは今まで無かった。しかし、先生のお話を聴いて考えてみれば、昨年MRAの箱根会議でお目にかかったマッケンジー氏やリーン氏も、何か先生と同じようなことを云っていたように思います。そのような立場に自分を置き、マッケンジー氏はブラント報告書の作成に参画されたのだと思うし、またリーン氏は「地球病の時代」を書いたのだと理解すれば、なるほどとよく解るような気がします」。

四、新時代の国際的連帯とは・・・第二のポイント

私「新時代がどのような時代であるのか、だいたいのイメージが浮んできたようだね。具体的な研究の課題としては、今後、もっともっと追求して行くことにして、このような新時代を人類が乗切って行くためには、どのような国際的連帯が必要なのかに話しを移そう」。

学生C「先生が先程おっしゃったように、過去における国際的連帯を歴史的視点に立ってながめてみると、何かあまり成功していないように思えてならないのですが・・・」。

私「うん、C君の言う通りだと思う。私は、現代における具体的でかつ大規模な国際的連帯のこころみは、過去二回あったと思う。そうした意味で、現在必要とされている連帯は、第三の連帯とでも呼ぶべきものだろう。

第一の連帯は、特にヨーロッパ社会に対して未曽有の惨禍をもたらした第一次世界大戦の教訓から生れ出たもので、具体的には国際連盟の結成という形をとることになった。しかし歴史が証明するように、国際連盟によっては平和を保つことはできず、第二次大戦が勃発してしまった。その原因については、国際連盟による集団安全保障制度の不完全さを指摘することができようが、しかし、私にはもっと根源的なところに原因があったような気がしてならない。このような感じを持ったのは、一九一九年に国際連盟が結成された直後、ほとんどすべての人々がこの連盟の成立をよろこび、永遠の平和の到来を確信し、有頂天になっていたちょうどその時期に書かれたアルバート・アインシュタインの小さな呪詛的とも云えるコメントを発見したことに触発されている。それは次のようなものだった。

『一七世紀に至るまで、すべてのヨーロッパの学者と芸術家は、彼等の間での協力関係が、政治的な出来事によってはまったく影響を受けないと云う共通の理念によって、密接に結びついていた。このような連帯は、ラテン語を一般的に使用することによって、さらに一層強化されていたのである。

今は、我々はこの現状の中で、過去を失われた楽園として懐しんでいる。ナショナリズムの激情は、知性をともなったこのような共同社会を破壊してしまったし、その結果、かって全世界をつなぎ止めていたラテン語は、死語になってしまっている。知識人は、最も尖鋭的な国家的伝統の代表者と化しており、従って、知的な共同体と云った考え方を失ってしまっている。

現在、我々は、政治家や時機にさとい現実的な人々が、国際的な理念の代弁者になってしまったという驚くべき事実に直面

している。国際連盟を創り出したのは、まさにそう云う人々なのである」。

私は、この天才の直観力のすごさに、一瞬頭がくらくらするのを覚えた。彼は、人間のエゴが作り出した国家といった巨大なエゴ完遂装置を通じて人類の国際的連帯をなし遂げようとすることは、それ自体矛盾であり、かつ喜劇的ですらあることを、一撃の下に、するどく論破したのだった。

その後、再び第二次世界大戦という愚行をやってのけた人類は、戦後国際連合を創設することによって、再度連帯を計ろうとした。第二の連帯がこれである。しかし、国際連合憲章に予定されていた集団的安全保障の理念は、米ソによる冷戦構造の中に引きずり込まれ、ほとんどその機能を果たせずに今日に至っている。この第二の連帯の失敗も、結局、その考え方が、第一の連帯の修正といった程度のものであったので、むしろ当然であると言ってよいのではないか。そして、今日、第三の連帯が叫ばれている。君らも知っているように、新国際経済秩序の創設がそれだ。しかし、新秩序創設の必然性についてはすべての諸国が首肯しながらも、ではどのような秩序を具体的に創るのかと云う点になると、国連での話合いは、例外なく、ほとんど行詰ってしまっている。国連の会議場には、国家エゴの嵐が吹き荒れている。このままでは、合理的な結論に達することなど、ほとんど不可能であろう。

アインシュタインは、一九三四年に『人間の本当の価値』と題して、小文を書き残している。「人間の本当の価値は、その人間が自我から開放されて自由を得たその方法と判断力によって、主として決定される」。つまり、**第三の連帯は、国家という枠組に限定されることなく、むしろ、エゴを克服して真に自由を獲得した個人の国際的連帯を基盤としなければならない**と思う。つまり、新時代の国際チームワークとは、このように考えて初めて、明確で具体的な概念として活きてくるはずである・・・」。

夜はしんしんと更けて行ったが、しかし、学生諸君の眼差は、ギラギラと輝き、何か心に秘めるものがあるように思われた。

（明星大学講師）

会議を振り返って

人間の尊厳と信頼関係を求めて

戸川宏一（シェル石油）

◇プロローグ◇

人類の平和と幸福は我々の永遠の課題であり目標です。全ての人が地球社会の一員であり、誰であろうとどこにいようと、あらゆる人々の生存と尊厳は共通の目標でなければなりません。今も世界の何ケ所かで悲惨な戦争が起っています。一部のリーダー達のエゴがもとで戦争が引き起こされて、沢山の人々が路頭に迷い飢えと渇きに苦しんでいます。

難民が、罪のない子供達が、今日も食物を求めてさ迷い、そして多くが飢えで死んでいるのです。このようなことに我々が無関心で良いはずがありません。我々はともすれば、世界の約半数の人々が飢えで苦しんでいることを忘れがちです。

エレクトロニクスの発達、その他科学技術の進歩によって経済生活は豊かになりました。

今、日本に直接影響がないから他の国のことはどうでもよい、といった狭い考え方ではなく、全世界的視野に立って何か援助出来ることはないか、人間としてなすべきことを考えねばならないと思います。このように自ら実践することにより、世界平和を達成し、次の世代に伝えるべき義務と責任があることを痛感しています。

物質文明の発達、合理主義、能率主義を決して否定しないし、むしろ人間のために大切であると考えますが、人間性の尊重、人間としての思いやりをどこかに置きざりにしてはならないと思います。

科学技術の発達、情報化の進歩によって地球は益々狭くなってきました。国と国とのあいだ、民族と民族の関係が深まり、相互依存と協力関係が一層強まってきました。それぞれの国で、大気や海洋の汚染、自然破壊、石油危機、天然資源の涸渇、インフレと不景気の波、経済的ナショナリズム、国際通貨危機といった種々の社会的、経済的問題に直面して悩み、共通の問題として、経済体制の根本的見直しを必要としてきました。

問題を解決するためには、すべての国が自国のエゴ、利益を優先するのではなく、全世界的な観点から真剣に解決策を考えねばなりません。今後ますますこういった視野で人口、環境、資源問題に取り組まねばならないでしょう。こうしてお互い手をとり、助け合うことによって、人類全体が生き残れる道を考えねばなりません。

物質のみを追い求め精神との調和を考えなければ人類の平和と幸福を保つことは出来ないと思います。このような調和のために、また国家、民族を超えてお互いを理解するためにも、MRAの存在が大きいと思います。

全ての国々に於いて、MRAの精神を基盤とした倫理感を持ち、それぞれの立場で、組織で、企業で、社会で平和と幸福を求めて努力しなければならないと思います。

◇分科会……◇

昨年同様今年も小田原のMRA国際会議に出席し、各国の方々のスピーチに強い印象を持ちました。多くの方が主張した国際社会に於ける日本或は日本

（裏に続く）

人の果たすべき役割についての卒直な意見を、私達が真剣に受けとめ、それぞれの立場で努力しなければならないと思います。同時に、更に努力しなければならないことは、日本を外人にもっと良く知ってもらうことだと思います。そのためには日本のことを我々が良く勉強し、充分な知識を持って説明し、理解してもらわねばならないでしょう。また外人が日本語によって直接日本のことを学び理解出来る機会を多くつくることも必要でしょう。とにかくコンプレックスを持つことなく、堂々と主張し、理解し合うことが大切だと思います。同じ基盤で話し合う環境の中から信頼関係を見い出す緒がつかめると思います。

これから世界に於いて、我々は国と国との関係、民族と民族との関係以上に人間個人と個人の関係をより大切にしたいと思います。

人類が平和で幸福であるために、様々なレベルで、様々な場で、個人と個人が信頼関係を持てば、世界を、社会を、そして企業を、世界の平和に貢献出来るように方向づけることが可能となります。

信頼関係をつくるために、まず自分の過ちを素直に認めることからはじめなければなりません。自ら謙虚になり間違いを改めることによって、相手に影響を与え、相手が間違っている場合には相手が変わるキッカケをつかむことが出来るのではないかと思います。

私自身、実践活動を通じ体験談を持ち合せていないのですが、会議に参加された各国、そして日本の代表の方々の体験談は本当にすばらしいものだと感心致しました。体験からにじみ出てくる話は、確かに人の心を打つものがあります。私も常日頃努力して、実践した上、心を開いて発表出来るようにしたいと強く感じています。又、分科会に於いては、個人と個人の連帯、そしてそれを強化するためどの様にして信頼関係をつくるかについて、グウイリム・ジェンキンス氏、ハインリッヒ・カラー氏を含め、多くの方と共に熱心に語り合いました。体験談を心を開いて話し合うお二人の人柄に接し、真の信頼関係をつくるためにはどんな修飾語の多い言葉で、理論的にまとまったスピーチをするよりも、自分で実践し体験したことを卒直に話し相手の心にふれることが、何倍も何十倍も大切だと知らされた気がします。

◇信頼関係◇

信頼関係を作るのは簡単なことではありません。謙虚さを持ち正直に、そして私利私欲のためではなく誠意ある話し合いを続けることが大切です。又、外国の方々との信頼関係を築くことも大切ですが、同時に日本の中でも多くの人がMRAを知り、個人と個人の信頼関係を作らなければならないと思います。

日本人がフランク・ブックマン博士の提唱されたMRAの絶対標準を理解することは、一見非常に難かしいように見えます。絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛という言葉に自分にはこの標準を守る自信がないと尻込みしがちです。私自身も自信があるわけではありません。日本と外国人は、歴史的、宗教的背景は異なりますし、思考方法、アプローチも異なるので、キリスト教的背景のもとではあたりまえのことが、日本ではそうでないかも知れません。しかし、よく考えてみますと、この4つの標準は宗教的背景に関係なく、人間として道義的に目標とするべき基本だと思うのです。人間は神ではないから、完全に守ることの出来る人は殆んどいないと云っていいでしょう。しかし、これらを目標として日常生活で努力することは出来るはずです。

信頼関係をつくることは難しいことですが、MRAの4つの標準を目標に皆が努力をし、人間どうしがお互いの心にふれあう時、本当に真の人間としての信頼関係を持つことが出来るのではないでしょうか。

◇エピローグ◇

ところで何年も前に聞いたブックマン博士の〝日本はアジアの燈台〟という言葉を、時々思い出します。これからの日本は、世界の中で、アジアの中で果たすべき役割は大きいと思います。受身ではなく、イニシャティブをとってMRA運動の発展に努力しなければならないと思います。

今年のMRA会議後、本郷氏、布施先生を中心に、日本でMRAのトレーニングコースを開いてみたらどうかとの計画が具体化しつつあります。日本でトレーニングコースを開くことによって、多くの東南アジアの人達が真に日本を理解し、全世界的なMRAの日本に於ける役割の一端を担うことが出来ると思います。

この計画は是非とも実現させたいことですし、一部の人達で行うのではなく、個人と個人の信頼関係を求めて、政治、経済、社会、文化など色々な分野の力を結集したいものだと思います。出来ることから一つ一つ積み重ねることが全ての人の任務ではないでしょうか。

今後の日本に於けるMRA運動の発展を願い、少しでも世界の平和と全人類の幸福のために個人と個人の信頼関係を築くことを願って止みませんし、私自身も微力ではありますが努力することを決意するものです。

（終）

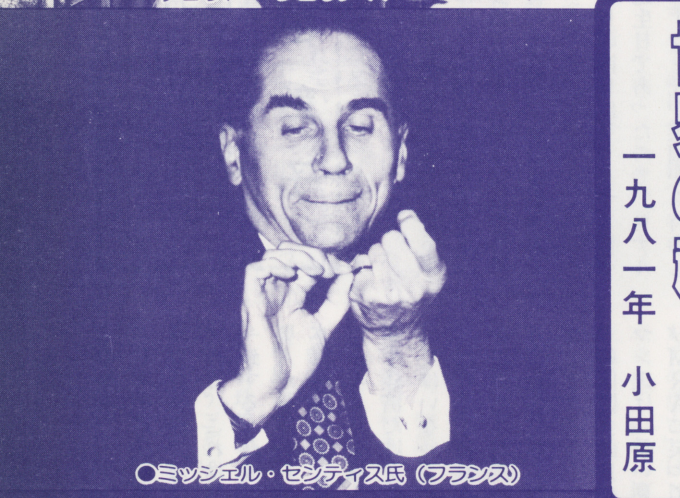
●全体会議より

世界の顔

一九八一年　小田原

●ナンシー・チョウ、スー・シュウメイ、グレース・ツァイ（台湾）

●ダリウス・フォルブス御夫妻（インド）



●ミッシェル・センティス氏（フランス）

●ジム・ベッグス御夫妻（オーストラリア）

●みんなで仲良く踊りましょう。

●ロレンツォ・デ・アンジェリス御夫妻（イタリア）

人生は良書との出逢いから

愛と幸せの発見　山崎房一

●定価1,000円 〒300

推薦の言葉

この書は、人間にとって何が一番大切か、それは心で、その心が、愛をもって人びとに接し、行動していくとき、すばらしい結果が生れ、人生最高の幸福を知るという体験記であり、深い感銘をうけました。

是非、ご一読をおすすめします。

経団連名誉会長　土光敏夫

PHD研究所

アジアの燈台に灯がともされた日

藤田彰子

六月四日より八日まで第5回MRA国際大会が小田原のMRAアジアセンターで開かれた。波静かなレマン湖を眼下にのぞむコー。

対照的に波荒い相模灘を見下す小田原城の一角に位置するアジアセンターの立地条件は似ているものがある。

海外よりの参加者33名、最も遠いチリと最も近い韓国から、共に参加載き感激した事であった。

会議は中嶋勝治氏によるアジアセンターの紹介から始まった。「当時の国鉄総裁十河氏の御尽力で旧閑院宮邸の土地が提供され、スイス人のルドルフ氏の設計により一九六二年MRA国際会議場として落成した。そして殆んどの施設調度品はMRAの人々の寄附によってまかなわれた。その後渋沢氏によって維持され、国際会議や研修会或は英語学校等に使用され今日に至っている」と。

紆余曲折はあったものの5回目にして由緒あるこのセンターで会議を持てた事は、古巣に戻り得たようで、誠に感慨無量であった。

初日の四日はブックマン博士の誕生日であったので、ロナルドローマン氏が英国から持参したスライドでブックマン博士をしのんだ。

〝日本は教えることが出来る〟

台湾のダニエル・リュー博士はこう発言した。「20世紀に於てマルクスは恨みを募って人間を駆りたてた。そしてもう一人フロイトは本能を闘争に駆り立て人間を分裂に追込んだ。即ち此の二人は否定的な考え方で道徳の頽廃を助長させ人々を戦いに追いこもうとした。これに対してブックマンは積みあげてゆく考え方即ち建設的な考え方を説いた。しかし第二次大戦をくい止めるにはあまりにおそすぎた。（中略）

日本の憲法は実に素晴らしい。軍事力を捨てたことは道義革命である。これはMRAの精神と一致する。蔣介石はじめ多くの要人が日本から学んだ。今、日本は教師になれることを忘れたかのように見える。まさか産業や経済だけが教える場だと思ってはいないことを願う」。

氏の言葉に日本人の在り方の一つが示されている。今更のように氏の慧眼に尊敬の念を抱いたことである。

韓国国会議員のチャン・スンマン氏は「長い夏休みを終え再びMRAに戻って来た。

石油危機に見られるようにエネルギー問題は深刻で私達は節約しなければいけない。

そのために第3のエネルギーとも言うべき愛をもって世界を作り直さねばならない。

人の心の中にある無限の愛を分ちあった時エネルギー問題の解決は近い。（中略）

日本に在住している韓国人の多くは自ら求めて日本へ来たのではなく、連れてこられた人が大部分なのです。どうぞ韓国人を思いやって下さい。」

私は韓国が〝近くて遠かった国〟であることをしみじみと知らされた。そして各人が真剣に〝あがない〟について考えなければならないと痛感した。

〝MRAはお相撲さん〟

フランスのミッシェル・センティス氏は、「相撲力士は太っているだけではいけない。戦い勝ちとることが必要でMRAのようなものだ。不正、飢餓に対して挑戦してほしい。

日本が戦いの準備をすることなく強大な国になったことを忘れないでほしい。」と発言した。

スイスで建設会社を経営するゴッドフリート・アンリッカー氏

「経営者として保護貿易には反対である。高い失業率は我々の失敗である。仕事を減らし望むものだけ高くするのはまちがい。

先ず自ら与え実行することによって初めて得られるのである。これが産業界の真の哲学である。」

ジェノバ大学で経済学の教鞭をとるロレンツォ・デ・アンジェリス氏

「日本の経済成長が世界で重要な役割を果たしていると考えることは決してまちがいではない。自動車にかぎらず日本の進出を阻止することに西側では必ずしも成功していないが、そんなことより日本経済の秘訣を理解するのが先決である。誰も貿易戦争は好まない。」

イギリスの鉄鋼金属労連の支部長グウイリム・ジェンキンス氏

「昨年コー（スイス）に来ないか、日本人が多勢いるよと誘われた。自分は日本人を三十年間嫌ってきた。十八才の時ビルマ戦線で日本と戦ったからである。だがコーに行って日産の石原氏、日通の赤城氏の話しを聴き、憎しみを謝罪せずにはいられなかった。

日本の工場がウェールズ（氏の出身地）に出来た時、それはきっと我々に貢献してくれることを信じている。」

尾関雅則氏

「組織が大きくなるにつれ小さな派閥ができてくる。それまで二、三日でできた決定に時には一ヶ月も費すようになる。人間関係がスムーズでない時は他を責めずに己れの非を認める原則に立ち戻る必要がある。」

以上のように各国の方々から貴重な意見を述べていただいた。〝総論賛成、各論反対〟の風潮はびこる現代に対する警鐘のようにも思えた。

会議の合間にはオーストラリアのアリステアさんの指導による若い人々のコーラスや、ニュージランドはマオリ族のラカイさんを中心とした本場仕込みの振り付けによる〝ハイレマイ(歓迎の歌)〟等を楽しんだ。

又会議中は朝食後のセンター周辺の散策も程よい語らいの場となった。コーの真下のシオン城がゲルマン系貴族の栄光と衰退の人間模様が浮き彫りにされた名残りであるなら、こちらは同じく鎌倉武士の血ぬられた権力争いの象徴とも云うべき小田原城がある。五百年前の北條一族をしのびながら空壕ぞいの道を歩いた。

オーストラリアのジム・ベッグス夫妻は欝蒼とした木立の茂る風景がメルボルンのダンデノンの山に似ていると喜んだ。ラカイさんと旧三井邸の庭を散歩した時、「蛇は出ないでしょうね、国には蛇が全く居ないので恐いのです。」と言う。何処ニュージランドに蛇が居ないのだろうと不思議に思ったものです。

青い魚を食べつけない外人にも、鰯の生姜醤油の煮付はホーレン草のお浸しと共に珍らしがられ好評であった。

若い人の活躍も目立った。英国、インド、オーストラリアとそれぞれのスタディーコースを受けた若い人十五名が将来への希望、抱負について各人意見をのべた。

蔡貴珠（台湾）

大学卒業後教師をしていたが父親に不満をもっていた。友達に心の声を聴くということを教えられ父親にあやまる気持になった。

その後オーストラリアのスタディーコースを受け中国を思うのと同じ位他の国を思わないかぎり、中国への解答はみつからないと悟った。

〝マキノで蒔かれた種〟

二十三年前アメリカのマキノ島に招待されてMRA精神を学んだ当時の青年団一〇〇名に、二宮氏や久保谷恵美子氏などが呼びかけ全国から十名がそれに答えて小田原へ集まった。

山村氏（枚方市）「自分は当時必ずしも模範青年ではなかった。しかし体のどこかにMRA精神が温存されていたと思う。」

二宮氏（小田原）「正直によって商売が成り立つ事を経験している。」

増田氏（姫路）「物事を処理する時、本音と建前があるが本音で話せば解決の道がある。」

米澤女史（山口市）「体内に積ったヘドロを除くつもりでやって来た。そして女性の地位の向上、MRAに対する恩返し、手紙を書くという三つのことを決心した。」

出来氏（鹿児島）「労組と対立した時、何が正しいのか考えようと提案して、問題を解決した」。

マキノで会得した四つの宝は体の中に残されていた。そしてそれが無意識のうちに実践されていたことを確認しあった。そしてこの会が友情復活のよすがともなったようである。

ブックマン博士の願った「アジアの燈台」は日本の至る所に点されていた。地方政治に、産業に、教育界に、そして家庭の中にも。

山崎房一氏は「第三世界で一番必要なことは〝リーダー達の野心による対立〟をなくすことである。問題を抱えている人にはコーへ行きなさいとすすめましょう。」

〝会を終えて〟

相馬雪香氏に「世界中の皆様から真珠のような言葉を載いて有難とうございます。我々は先ず日本を知らなければならない。そのためには先ず自分を知らなければならない。」と会を結んで載いた。

新田氏の「MRAをもっと積極的に広めてほしい。ユネスコか国連に訴えてでも……」の言葉に若い人の情熱が集約されたような感動を覚えた。ともあれ今年も世界からの友人を交えて語り終えた時、ほのぼのとしたぬくもりが体をよぎった。

又逢いましょうと約束して別れをおしんだ。

グウイリム・ジェンキンス氏

インタビューシリーズ　私の提言

第2回

コモエスタ・ウステ？

いささか受ける感じは悪いかも知れないがあえて4人組と呼ぼう。チリからのその4人組は初めて会った時と変らぬ陽気さで〝アディオス・アミーゴ（さらば友よ）〟と私の手を固く握りしめ、そして日本を去っていった。

彼らが与えてくれたものは計り知れない。言葉は通じなくとも心は通じることを今回ほど感じたことはない。何時か再会出来たなら呼びかけてみたい〝コモエスタ・ウステ（ごきげんいかがですか）〟と。

尚、今回のインタビューに献身的な協力を頂いたエルサバドルからの留学生ベアトリーズ・ソトさんに心から感謝します。

《寒河江　亮》

ディアズ

ブストス

オルティズ

ブリセノ

―今回の来日の目的は

ブリセノ

今回の来日の主な目的は、小田原そして大阪で行われたMRA国際会議に参加するためです。もち論、日本の労働関係の方々とお会いすることも期待しています。スイスのコーで昨年日本のMRAの藤田さんとお会いして、それが縁でこの会議にご招待を受けた訳です。

―皆さんの会社を簡単に

ブリセノ

私達の会社カンパニア・デ・アセロ・パシィフィコは一万五百人の従業員を抱え、製鉄と加工の二つの部門に分れ、鉱山と製鉄プラントの二つから成っています。

私達の作った製品は冷蔵庫や罐詰の罐の原料などとして幅広く利用されています。

―あなたの組合と自身の組合活動歴を

ディアズ

私の組合はチリ北部にあるラ・セレナという町にあります。一九五六年に結成され、現在一四〇〇人の組合員と七人の組合専従がおります。私が組合活動に入ったのは一九六五年で一九七四年まで続けました。その後六年間のブランクを経て昨年から議長とし組合活動を再開しました。

―日本の印象は？

ブストス

非常に技術革新の進んだ国だというのが私の受けた最初の印象です。社会のいたるところでそれを容易に見ることが出来ます。

私達が日常日本について語っていること、例えば日本人は非常に働き者であるとか、色々な物を改良することに長けているとかそれを今まさに目のあたりにしている思いです。

日本人を見ていると一心同体であるという気がします。その点ヨーロッパ人とは違うと思います。

又、人口問題が日本の大きなネックであると聞かされていた訳ですが、来日してみると想像していた程ではないことが分りました。

―日本とチリは地理的には大分離れているのですが皆さんの日常における日本とは？

ブリセノ

私達の日常生活で日本を意識することは毎々あります。チリにはそれこそライターから自動車に至るまで、沢山の日本製品が輸入されています。しかし残念ながら日本人と会う機会はそれ程ありません。特に私の住んでいる北部では全どありません。

最近チリを訪れる日本人の数は次第に増えつつありますので、私達が日本人について話す機会も相対的に多くなっています。

マスコミでは日本に関するニュースが幅広く報じられています。港では日本の船を数多く見ることも出来ます。

私は日本人の黒いひとみを見ると非常な親近感を覚えます。ですから日本に来れたことは私にとって大きな喜びですし、日本で不自由さを感じることはありません。

―来日以来多くの組合関係者そして経営者に会われたことと思いますが、チリとの違いについて聞かせて下さい。

オルティズ

私達の目には日本の労働組合は会社と密接に結びついているようにうつりました。

チリのほうが組合の独立性というものがより高く保たれていると思います。労働者個人の問題ではなくて組合そのものが会社側と非常に強いつながりを持っている点が違うのです。

来日以来、確かに多くの人と会いましたが、日本の種々の事

情について充分理解している訳ではないし、又考え方も違うでしょうしこれが良くてあれが悪い式に比べるようなことは無意味であると思いますので、個人的な意見を述べたり、断言したりすることはさけたいと思います。

ただ日本人が働き者であることとその協力性は、はっきりと見ましたのでこれからもこれらの方々と出来るだけ接触を続けて日本人から多くのことを学びたいと思っています。

—あなた自身組合の議長として直面している問題はありますか？

ディアズ

私達の抱えている問題が他の国々のそれと比較してそれ程違っていることはないでしょう。会社も解決に力を貸してくれます。

ただ二年毎に会社側と結んでいる一種の協定を更新するのが大きな仕事ですが、私はまだ議長に選出されてから八ヶ月なので現在のところ特にこれといった問題はありません。

—三年間にわたる社会主義政権下における組合活動の体験から当時と現在の違いを一言……

ブストス

それはまさに共産主義独裁へ向けてスタートしようとする一つの転換期であったと思います。しかしながらそれは七三年に終止符を打ちました。社会主義政権下では多くの労働組合員達が政党の指令によって活動していました。確かに労働者に自由は与えられました。しかしそれに秩序というものが欠けていたのです。工場の占拠やストライキをすることも何もかもが彼らの思いどうりになりました。組合の力があまりに強大なため、経営者は彼らに対して何も言う事が出来ませんでした。当時の彼らにとって政治活動が組合活動より重要であったのです。

現体制下（ピノチェスト大統領を議長とする軍事評議会による軍政）では色々な事がよく組織化されていると言えるでしょう。

例えばストライキなどに政府（又は政治力）が介入することはもうありません。経営者と労働者自身が自ら事態をコントロールし、解決を目差します。ちょうど日本に来る少し前、銅を生産している別の会社で大きなストライキが三十六日間も続きました。以前ならたちまち政府が介入していたことでしょう。

現在は労使間のことは労使にまかせるという政府の方針が確立しているのです。

これが大きな違いです。

—ここ一年来ポーランドにおける一連の動き、すなわちワレサ率る自主管理労組〝連帯〟が世界の注目を集めています。皆さんはどう受けとめていますか。

ブリセノ

私達は実際のところ、マスコミで報道される事以外にポーランドの現状について知っている訳ではありません。

背後にソ連の圧力がある訳で、あれでは真の意味での社会主義と言えるかどうか……。

とにかく多くの理由によって事態は複雑化しています。

私達の経験（七〇年九月から七三年九月まで続いた人民連合サルバドル・アジェンデによる議会制社会主義体制下における組合活動）から言えることは、ポーランドの人達は自由を求めているのであろうし、今起っている動きは社会体制に対する人間としての反応だということです。

誰であろうと民主的な考え方を基本とする人ならば、現在ポーランドで起っていることを尊重しなければいけません。

—南米やラテンアメリカではクーデターが頻繁に発生するというのが一般的日本人の頭にあります。そしてその現状を理解するまでには至っていないのが正直なところです。

そこで流血なき社会改革というものに関してあなたの考えを

ブリセノ

確かにラテンアメリカでは暴動や流血が存在します。しかしそれ自体は世界中いたるところで見られるもので特にラテンアメリカだけの問題ではないでしょう。

この問題を解決するためには多くのことが改善されなければなりません。

第一にすべての人に本当にふさわしいポジションを与えるということを政府・民間ともども考えなければいけません。

第二に人間を本当に人間として扱うことです。

もしそれらの条件がみたされなければ、人々は爆弾のように破裂するかも知れません。

何者かに扇動される恐れもあります。とにかくこれらの解決なくして社会がスムースに運営されることは難しいと思います。

—日本、そして日本人に対してどのような形で世界、そしてみなさんの国に貢献してほしいと望みますか？

オルティズ

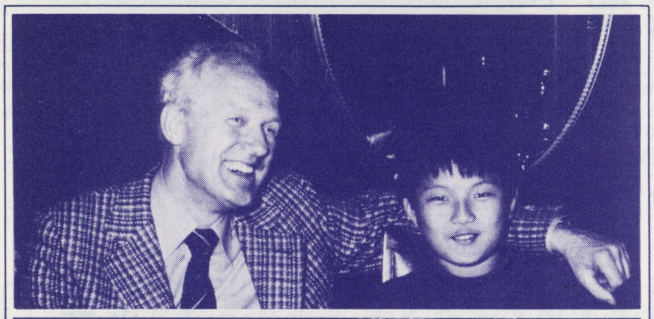
確かに私達のような国々にとって日本のような技術的先進国からの技術的・商業的な援助は必要ですし、又望んでもいます。

しかし大切な点は、お互いに恩恵を得ることの出来るということです。日本にだけの利益であっては困ります。

富める国からの援助の仕方によっては、時にはそれが悪影響をその国に与えることもあります。必要であるということ、そしてそれをどの様な形で受け入れるのかということは、私達そして皆さんの共通の課題でしょう。（終）

LETTER from abroad……1

見た日本 感じた日本



西洋化と伝統的ライフスタイル

ミセスヴァンダー・ジー

◇日本を去る◇

今、故国へ戻りました。私は初めて訪問した日本の印象を書きとめてみたいと思います。日本滞在を多いに楽しみ少しずつ日本の魅力が分かりかけてきた頃に日本を去らなければならなかったのは淋しい事でした。

私の印象が正確でかつ完全であるとは私自身ですら考えておりません。ですが、私が日本で学んだり体験した事を書きとめておくことは、少なくとも私自身のために重要であると思うし、又この一文が私達がより理解しあう一助になれば幸いです。

◇驚きと発見◇

日本到着後しばらくは人が非常に多いのに（特に若い男女）圧倒されました。

混雑した街中はもち論のこと、郊外でさえも家がびっしりと建てられ、又狭い道の両側に巨大な西洋的デパートが建ちならぶ様や、地下のショッピングセンター等も驚きでした。

人々の動きにある種の規律があることや、多くの店の店員や人々が駅や他の公共的な場所をきれいにしている姿に感銘を受けました。

正直に言うと日本が外観的にはあまりに西洋化しているのを

"大きな人"……

ミセスヴァンダー・ジー

◇船本三枝子◇

ヴァンダー・ジー夫人に初めて会ったのはニューMRAハウスオープニングの日であった。婦人会のメンバーが何十人という来客の接待や食事の仕度にせわしなく働いている台所へ、その"大きな人"はあらわれました。

裏方の人々に感謝の意を述べ、繊細な盛り付けの日本料理を学びたいものだと言った。

それがきっかけでそれから彼女は毎週火曜日にハウスを訪れ、午前中は台所のお手伝、そして午後は丁度その時始めたばかりの英語のクラスの手伝をしてくれるようになった。夫人を見て感心させられる事はいくつもあるが、中でも彼女の飽くことのない向学心と謙虚さには打たれました。短い日本滞在にもかかわらず、常に心を開き私達の話しを忍耐強く聞いてくれたものだ。煮干の話しからオランダの水路、又彼女自身のMRA体験に至るまで話してくれる彼女の前では、誰もが肩肘を張ることなく心を開くことが出来た。バザーの時にはお手製のバタークッキーを大量に焼いて寄付してくれたり、日本での最後の火曜日には私達のためにオランダ料理に腕をふるってくれた。

"いい人だな、元看護婦さんだから人ができているのかな？"それが私が彼女から受けた第一印象だった。後日、あらためて彼女の人となりを考える機会がきた。ある本を読んでいて第二次大戦下における元オランダ領インドネシアにまつわる彼らの根強い反日感情を知ったのである。看護婦として船上で働き、その若き日をインドネシアで過ごした彼女の心の奥底の古きずあとは果して癒えたのだろうか？

無心の心で私達に接してくれた"大きな人"に私はもう一度心より感謝を捧げたい。

見て、はじめはがっかりしました。しかし幸いなことに日本の社会に伝統的なライフスタイルが残っていることを十分理解できるまで日本に滞在出来たことをうれしく思います。

日本の有名な神社仏閣や公園庭園等を見るのも楽しみの一つでしたが、自分ひとりで観光ルートではない東京、横浜、鎌倉の街を歩くことや、名も知れぬ小さな社を訪ね、垣根の間から普通の家庭のお庭や典型的な日本家庭や商店においてある盆栽をながめたり、オランダの主婦にはけんとうもつかない多くの食品を並べているマーケットを見るのも大変面白い体験でした。

私が道に迷った時は、背の高い外人にびっくりしながらも人々が親しみを込めて手をさしのべてくれ、お店では、味見もさせてくれた上、買わせようという下心なくあちらこちらを見せてくれたり、美しい品物を出して見せてくれることも度々でした。

電車の車掌さんが改札で車両に出入りするたび、乗客にあいさつをするのを見て大変すばらしいことだと思いました。店やレストランに何回か足を運んでいるうちに歓迎されているのが分ってきます。時にはそこで支払った代金に比較して高価すぎるプレゼントやおまけをいただき、どうしていいのやら当惑することもありました。

私達は多いに観光を楽しみながら写真やスライドを友人に見せたり、又記念にする為撮りました。しかし最も記念となったのは人とのつながりでした。しばしば日本語を話せないことを残念に思い、英語を話そうとしてくれる人々に感謝しました。たとえそれがわずかであっても、私達にとってはコミュニケーションの糸口であったからです。

外国へ行く時はその国の歴史や文化を知っていると知らないでは面白さがまるで違うので、前もって勉強を十分にする必要性を感じました。自分が真摯に興味をいだいてその国の背景や事情を多少なりとも知っていることが理解されれば人は心を開いてくれることを発見しました。

私のいろいろな質問に答えてくれたり、又私達を「ホームビジット」という形で日本の家庭に紹介してくれた横浜ツーリストインフォメーションに感謝しています。心を開いて語り合い、お互いの体験や伝統文化を知るという事の意味するところを学ばせてもらえたと思います。それから日本料理、人形づくり、生花の初歩を教えてくれた御婦人達にも大変感謝しています。ある時、大宮で年配の庭師の方がほとんど英語を話せないにもかかわらず、盆栽を作るにはどれ程の注意や忍耐と時間のかかるのかを身振り手振りで説明をしてくれ理解させてくれたこともありました。

◇主婦の役割とは◇

西洋と日本の主婦の役割の違いについて今私は考えています。西洋には、自らをフェミニストと呼びより多くの権利や社会の変革を求め、自分をとりまく環境に満足していない女性が大勢いて自分達の空虚な生活は社会や男性のせいであると非難しています。

私は、人をいたわったり、食事の用意の仕方や配膳に細心の注意を払い、子供達と過ごす時間を作ることがどれほど私達に満足感を与えてくれるものかを日本で知ることが出来たと思います。しかしながら、最近日本の若い女性達が日本の伝統の良さというものに背を向け、何でもかんでも西洋のまねをしつつあるのは残念なことだと思います。マネをしようとするのではなく、私達西洋の人間と日本人が共に体験や失敗をわかちあい互いに利己的な態度を改め、伝統の価値を見失なうことなくより大きな目的のために協力するならば、お互いより多くのことを学べるに違いないし、権利ばかりを主張することもなくなると信じています。

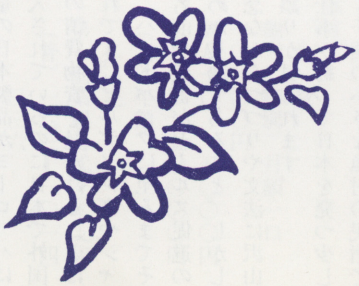
この滞在中、主人は造船所の仕事が忙しく私は一人であちこち出歩いたり人に会うことが出来ました。主人と毎晩それぞれの体験や受けた印象を話し合うのは楽しみの一つでした。又、造船所の技師の方が自宅によんで下さりお花見をしたり、御家族の方々と会えたのも楽しい思い出です。私が共にいるということで主人が日本の方とより深いお付き合いが出来、日本人の生活をより多く学べたと思いました。

◇共通の基盤◇

最後に日本で一番強く感じた事を書きます。それは社会ではだれもがその人なりの雰囲気をつくり出し、それが他人との関係に良きにつけ悪しきにつけ影響するのだという本当に簡単なことです。その当り前のことが私達婦人がそれぞれの立場で出会う人々や外国人との友好やよりよい信頼関係に与える影響について考えなければならないと思います。我々が生活する上において真に道徳的な共通の基盤を見い出すことが出来たなら、いかなる状況においても個人や国のアイデンティティーを見失うことはないでしょう。

最後に主人といっしょに小さな漁村の民宿で休暇をとり、その地方の名物をいただいたり日本式に暮すことが出来ました。

日本の皆様が、他人同志がわかち合い感謝しあう日本の伝統を大切にして下さるようお願いしてこの手紙を終ります。



○次ページでやはり御主人から寄せられたお手紙を紹介いたします。
女性と男性の物の見方の対比は大変興味深いものがあります。

忘れ去られた伝統

ミスターヴァンダージー

最初に印象とは必ずしも完全なものではなく、又様々な経験を重ねるにつれ更に不明確になっていくということを御承知願いたいと思います。

横浜の造船所で当社の船を四隻改修するための監督として再び来日することが出来ました。昨年二ヶ月半、そして今回四ヶ月半横浜を中心に滞在しました。

横浜は航海士として以前何度か寄港したところですが、今回は初めて来日した妻と滞在出来、より人との接触もふえ以前とは違った過ごし方をすることが出来ました。

東京、横浜でまず驚いたことは、この様に狭い地域に沢山の人が住んでいること、かつ何もかもが驚く程スムーズに規律を保っていること、巨大で完全な機構により都市には食品を、産業にはエネルギーや原材料を供給していることなどでした。

その外、小さな家に住む伝統技術、近所の人々と仲良く暮していく技術を学びました。

それは私に戦前のヨーロッパの都市で、人々が狭いところに住まざるを得なかった時の状況をおもい起こさせました。当時これらを実行していくには伝統や規律を厳しく守らなければなりませんでした。

西欧諸国で多くの伝統が失われつつある現在、日本人が一体どの様にしてルールや伝統を守っているのかと、私はしばしば考えさせられました。

◇共通の基盤◇

さて造船所での仕事は楽しいものでした。

それは別にこの仕事が私にとって初めての面白い仕事だったからではありません。

日本人技術者の技術や仕事に対する姿勢が職場になごやかな雰囲気をかもしだしているという事なのです。ここで得た友情や私に対する忠誠心を文章であらわすのは難しいことです。私にとって生涯忘れられないものとなるでしょう。職場では仕事の話ばかりではなく、私が発した数々の質問や他の話題についても仲間とよく話し合いました。時には驚くほど心を開いてくれたこともありますが、一般的に言えることはお互いに文化の違いを主張するだけでは相互理解には十分ではないということです。とにかくそんな話し合いの中で私が一つ思ったのは、日本の男性は妻よりも経営者と婚姻関係を結んでいる様に見えるということです。その点は私のような海の男と共通しているところでもあります。

船上での仕事は昼夜兼行だし、それは航海の続く限り終らないのです。しかし、それでも私は一年の3分の1は家庭にいるし、そうでない時も妻が家庭をとりしきり、私が留守の間も囲りの社会との接触を維持してくれています。私の見たところで比較すると、日本の主婦はより受身で御主人との共通の基盤が少ないように思えます。もち論伝統は尊重されなければならないが、才能が用いられず無駄になっているのではないか、夫婦が新しい道を見つけもっと共に過ごすべきではないのかと考えずにはいられませんでした。ただ、いい伝統が近代化の波にさらわれることのないよう、健全な基盤を確立することが何より大切なことです。

◇閉鎖社会◇

以前には気がつかなかった事のひとつとして日本ははるかかなたの国で、国際的な接触を持っているのはひとにぎりの人間だけであるという事実です。それに国は小さいが、近隣諸国の文化と接している母国オランダと比べ、外国から大変熱心に学び外国との交流が増えているにもかかわらず、日本がいまだに閉鎖社会からぬけ出せないでいることは残念なことです。例えば外人が日本国籍を取得するのはほとんど不可能に見えます。大量の日本製品がヨーロッパに輸入されているのに日本で外国製の消費物資を見かけることはまれです。ビルディングやシャツ、ハンドバックに至るまでその名前や広告がセールス促進のためか英語であること。しかし残念ながらつづりや文法に沢山の誤りが見られます。

仕事が終って日本を発つ少し前、千葉の小さな漁村の民宿で一週間の休暇をとりました。ここでも日本滞在のすべてを象徴するかのような楽しい思い出をつくる事が出来ました。

どこへ行っても暖かいもてなしと私達を助けよう、喜ばそうという人々の心遣い。

しばしば何のお返しも出来ない、そして十分に感謝の意をあらわしきれない自分達に歯がゆさを感じました。

今回体験したすべてのことを決して忘れることはないでしょう。

MRA世界のセンターめぐり

第4回 フォーティーフォーチャールズストリート（イギリス）

市原登志子

◇世界の表玄関◇

ロンドンはファッショナブルな繁華街の中心に位置するMRAハウス、フォーティーフォーチャールズストリート（これは本来はこのハウスが位置する通りの名ですが、いつもこう呼ばれます）は、ロンドンヒースロー空港がそうであるように常に世界の表玄関となるべく三十年間にわたりMRA運動のために運営されてきました。

◇ハウスの役割◇

ケン・リムジーさんと云うスコットランド出身の実業家が彼の資本を使って神の御心にかなった事をしたいと云う願いから、第二次大戦中に此のハウスの権利を得てMRAに寄付されたのでした。

爆弾の降りそそぐロンドンの中心にあるこのハウスを選んだのは彼の賭だったといえるでしょう。戦火の中を生きのびたフォーティーフォーチャールズストリートは彼の決心を受けつぎ、世界へとりつぱに貢献しています。

MRAの創始者である故フランク・ブックマン博士への贈呈品を含め、このハウスを飾る家具調度品から陶器、銀製品に至るまでが多くの人々の犠牲がはらわれています。

このハウスの目的は多種多様ですが、アメリカ大陸からヨーロッパ、そして世界各地から訪れる人々を暖かく受け入れそして目的地へと送り出すという世界のかけ橋としての役割を果たしています。まさに世界がとびこんで来るという感じです。

各界からゲストを招き晩餐会やパーティーなどに幅広く使われています。このハウスに集うそれぞれが職場をはなれ立場を超え、国籍を越え、又宗教をも乗り越えて心を開いて語り合う、そこに信頼という和が生まれ新しい人間関係を創り出していきます。

◇家庭の暖かさ◇

此のハウスの責任者でもあり同時に英国MRAの理事長をされているゴードン・ワイズ御夫妻は、とても日本びいきで日本をそして日本の将来をよく考えてくださっています。駐英日本大使御夫妻をはじめ、ロンドン在住の日本人をゲストとしてしばしば招待しては国際交流の促進に努めていらっしゃいます。

六階建て十九人収容の細長いフォーティーフォーチャールズストリートではワイズ御夫妻を中心に絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛という標準をもとにそれぞれ異った環境、国を持つ家族一人一人がそれぞれの仕事を持ちながらも素直に感情を打ち明け、相手を又相手の国を思いやり、理解しようとする努力の過程を通してチームワークというものを築きあげています。

このようにここにはセンターというよりも家庭といった雰囲気があります。そこにこのハウスを訪れる人々の心の奥深くに暖かいものを感じさせる秘密があるのかも知れません。（終）

市原登志子さん

●次回はフランスのMRAセンターをご紹介いたします。

御案内

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際産業人会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせて頂きます。

一、会費

個人（特別）月額一口 一〇〇〇〇円

個人一口 五〇〇〇円

法人一口 五〇〇〇〇円

（共に年額）

一、払込先

第一勧業銀行代々木支店

（普）一六三—一〇一四

三三六

住友銀行新宿西口支店

（普）二五九—四一八三

七九

富士銀行動坂支店

（普）八六一—二二〇

国際MRA日本協会宛

◇ケインズの言葉

今日の革命家はあすの反動家になるということわざがある。権力は必らず腐敗する。

誠実な人間こそが新しい社会の基礎となり得るのであるから、そのための戦いを明日にのばす必要は全くないのである。

資本主義の経済学者ケインズは経済基盤がある程度でき上るまでは誠実さは待つべきだという考えを持っていた。一九三〇年に書いたものの中で彼は次のようにのべている。

『少なくとも後百年間位は、人にも己れにも、公正はよくなく、不正はよいと思い込ませなくてはならない。なぜなら不正は役に立つが、公正は役に立たないからだ。まだ暫くの間、強慾、高利、人に対する警戒心などを神としなければならない。これあってこそ必要な経済的基盤を得るまでの暗黒のトンネルをぬけ、明るみに出ることができる』ケインズは道義基準は進歩への障害だと考えた。

資本主義を敵視する人びとと博士とが同意する唯一の点が誤りであるとは全く皮肉なことである。

◇第四章―暴力

「一人のヨーロッパ人を撃ち殺すことは、一石二鳥だ。死んだ男と自由を得た男が残る。」とフランスの哲学者ジャン・ポール・サルトルはファノンの「地球上のみじめな人」への序文で述べている。しかし、必ず復讐が後につくであろう。人類が直面している最大課題の一つは何億もの人びとのみじめさを克服するために果たして豊かな国ぐにと貧しい国ぐにとが協力できるかどうかである。

暴力的な解決は、かえって人類を今後血みどろな闘いに長い間追いこむことになるであろう。それはまた、悪に屈服することでもあり、よりよい選択をもたらすことのできない自らの不能力さを示すことである。

我々を含めて多くの人が水爆の現実に目を閉じている。恐れによってそのことを考えたくない人もいれば、自らの安全や希望の依り所としている信条や戦略をくつがえされるのを嫌って考えまいとする人もいる。爆弾が課している冷酷な現実よりもいまだに核以前の時代に生きているという幻想を好みがちである。

張り子のトラのような国もあるかもしれないが、爆弾は違う。我々は全人類の衣食住をどう賄うかについて論議しているが、核戦争がおきればこのような努力は水泡に帰してしまう。ソビエト連邦とアメリカ合衆国はキューバをめぐる対立で深みにおちいったとき、核戦争ではいずれにも勝利はありえないと結論したようだ。

◇暴力は世界を変える

爆弾の使用を決定するのは超大国ばかりではない。危険なことは小規模な暴力のつみかさねを見すごしてしまうことである。「暴力行為は世界を変える。しかし、より暴力的な世界へと変ってゆく公算が大きい。暴力の危険性はたとえそれが目先の目的のために過激でない形で行使されても、手段が目的を圧倒してしまうことにある。」とハンナ・アレンドは「暴力について」で書いている。

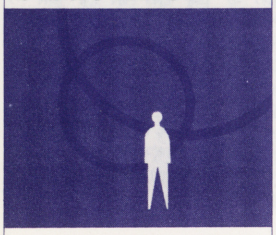
アナーキストのバクーニンがとった方法に対するマルクスの批判は、彼もこの課題で悩んでいたことを示すものである。シュロモ、アビネリは「カール・マルクスの思想」の中でこう書いている。「マルクスの実践論によれば、それがもたらす革命が将来その社会の体質を形成することを彼自身も察知していた。恐怖やおどしによる革命運動は終局的には、そのような方法に根ざした社会をつくる。」ロジャー・ガラウディもこの点に触れている。「権力を掌握してから構造を無理矢理変え、権力の座から自由を与えることは出来ない。目的に相応する手段を我々はいかにして見い出すことが出来るだろうか。」

かといって変革をもたらす手段としての暴力を全く捨てきることは出来ない。抑圧的な政権が人民をその支配下におき自由を拒否している場合、暴力による道しかないこともあり得る。

多数の意志に反して国民を支配する政府は、外見的には平和に見えても暴力を行使しているのである。こうした抑圧を許容している人は、えてして状況を改革しようと武器をとる反抗者をすぐにも批難したがる。

（続く）

Jens-J.Wilhelmsen
Man and structures



原語版（英語）
Man and Structures
（人と機構）
発売中
定価 550円